

* * * * *

「毬江ちゃん。本当に結婚指輪だけ買って、婚約指輪は買わなくていいの？」
「うん」

その答えがあまりにも明快でとても幸せそうに毬江が微笑むものだから。

だから愚問とわかつていても、大事なことだったからつい聞き直してしまうんだ。

「だって、もう指輪もらっているし……」

そう言つて毬江が左手を差し出すと、薬指には毬江が大学に入った年に買ったペアリングが輝いていた。

「初めて小牧さんからもらった指輪、ものすごく嬉しかったし、

これからもずっとつけていきたいから。だから、婚約指輪は買わなくていいの。

それに結納の時の婚約指輪は、お母さんから譲り受ける約束をしたし」

「……わかった。なら婚約指輪を買わない分、結婚指輪を奮発するよ」

「へへっ、ありがとう」

本当に参つたな。初めてあげたペアリングを大事にしてくれる毬江が愛おしかった。

だから宣言通り、本当に奮発したいんだ。内心で小牧はそう思いながら、いざ結婚指輪